グラビア紀行

釜石鉱山をゆく

資源小国といわれる日本。しかし岩手県釜石市には、かつて良質な鉄鉱石を産出する日本最大の鉄鉱山が操業していた。なぜ釜石の山中にたくさんの鉄鉱石があったのだろうか、そして一体どのように掘られていたのだろうか。釜石鉱山を訪ねた。

60％以上の鉄分を含む高純度な磁鉄鉱（じてっこう）の岩盤

三陸海岸の良港・釜石港から西へ約20キロ、標高550メートルの地点に、釜石鉱山の坑道入口がある。標高1000メートル前後の比較的なだらかな山並みが続く北上山地。その直下の南北約6キロ、東西約2キロのエリアに、いくつもの階層に分かれて総延長約1000キロに及ぶ坑道が、巨大なアリの巣のように広がっている。

坑道内の気温は1年を通して約10℃と一定している。夏は涼しく、冬は暖かい。新緑がまぶしい5月末、釜石の日中の気温は20℃を超える。そのため坑道の入口から冷たい空気が吹き出してくる。

ゴトンゴトンとトロッコに揺られること約10分、これまで緑色や茶色のまだら模様だった岩肌が黒色に変わった。磁鉄鉱と呼ばれる鉄鉱石だ。かつて4人一組で重機と火薬を使い、地中奥深く磁鉄鉱の硬い岩盤を掘り進み、鉱石を次々と貨車に載せ、坑外へと運び出していた。

釜石鉱山の地質は古生代石炭紀～二畳紀の石灰岩や粘板岩などの堆積岩類と、これらに中生代白亜紀に貫入した火成岩類から成る。マグマからもたらされた熱水と石灰岩との化学反応により、スカルンと呼ばれる変成岩が両者の間に形成され、その中に大規模な鉄や銅の鉱床が誕生したのだ。

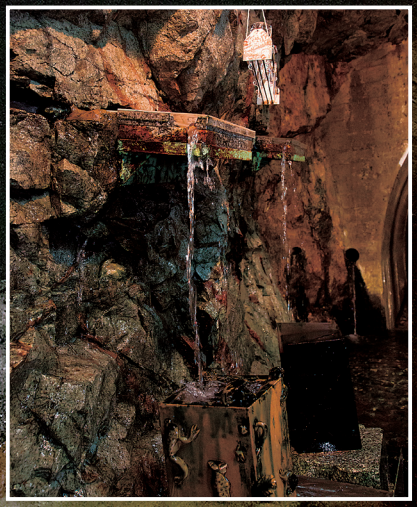
幅3.0メートル、高さ2.5メートルの坑道が網の目のように広がる

岩盤に削岩機でいくつも穴を開けてダイナマイトを差し入れ、火薬の爆力で岩盤を砕いて地底を掘り進めていた

バケット容量1.5～3立方メートルのスクープトラムという坑内用重機に積み込まれた鉱石は鉱車で坑外の選鉱場へ運び出された

礫状に磁鉄鉱を含む石榴石スカルン

坑道間の落差を利用し水力発電を行い、地域に電力を供給している



岩盤の裂け目からコンコンと湧き出す地下水。ミネラルウォーター「仙人秘水」（モンドセレクション2017最高金賞受賞）や化粧水原料に使われている

坑道内の保守点検を行っている釜石鉱山（株）の皆さん

釜石鉱山の始まりは1727（享保12）年、江戸幕府の採薬使だった阿部将翁（しょうおう）によって磁石岩が発見されたことにさかのぼる。江戸時代には川原で拾われた餅鉄と呼ばれる石や花崗岩に含まれる砂鉄が鉄づくりに使われていたが、1857（安政4）年に盛岡藩士の大島高任（たかとう）が洋式高炉と鉄鉱石で鉄づくりに成功すると、本格的に鉱山が開発された。1880（明治13）年には釜石製鉄所へ鉄鉱石を運ぶための鉄道が開通した。新橋・横浜間、京都・神戸間に続く、日本で3番目に開業した鉄道だった。

釜石鉱山の鉄鉱石は枯渇することはなかった。最盛期には約3000人の直轄従業員を抱え、累計7000万トンの鉱石が採掘され、鉄分量にして1400万トンの鉄鉱石を供給し、江戸時代から平成の初めまで日本の鉄づくりの発展を支え続けた。転機が訪れたのは1985（昭和60）年のプラザ合意だった。急速な円高により国内における金属価格が急落した影響で、1993（平成5）年に大規模な鉄鉱石の採掘を休止した。

釜石鉱山は現在、地下空洞跡地を水力発電や音響実験室などに活用している。岩盤の裂け目からコンコンと湧き出し、かつて鉱山で働いていた人たちの喉をうるおした地下水は、ミネラルウォーター「仙人秘水」に使われている。坑道から地上に戻り、仙人秘水を飲む。まろやかな口当たりとほのかな甘みがおいしい。豊富な鉄分を含んだ岩盤が巨大なろ過装置となり、自然の恵みを届けてくれた。

およそ150年にわたり日本の鉄づくりを支え続けてきた

鉱石をより分けていた選鉱場跡

かつて坑内事務所兼休息場として利用されていた空間を地下音響実験室「グラニット・ホール」として活用。演奏家のレコーディングや実験的なコンサートが開かれていたこともある

国登録有形文化財の旧釜石鉱山事務所。現在は展示室として利用されている